

MSJ2021-011

2022年6月24日

熊本防衛支局長

小森達也 殿

一般社団法人 日本哺乳類学会

理事長 押田龍夫

**馬毛島におけるニホンジカをはじめとした哺乳類の保全について**  
**－環境影響評価準備書に関わる要望－**

馬毛島のニホンジカ（以下、シカという）個体群は、小島嶼で長期にわたって存続してきたという歴史性と島嶼に適応した様々な生物学的特徴を持っています。環境省レッドリストにはニホンジカ（*Cervus nippon*）の「絶滅のおそれのある地域個体群（LP）」、鹿児島県レッドリストには「情報不足（地域個体群）」として掲載されている重要な個体群なので、将来にわたって保存される必要があります。

この度、馬毛島基地（仮称）建設事業に伴う環境影響評価準備書が公表され、基地建設事業の概要、シカをはじめとした生物と環境の調査結果、およびそれらの保全策の概要が明らかになりました。環境影響評価準備書では島面積の88%に及ぶとされた事業実施地域は、準備書によれば工事中で61%、工事完成後の基地面積は51%に縮小されました。その結果、シカ個体群等を保全するための条件の一つが、十分とは言えないまでも生まれたと認識しています。

この可能性を現実化する立場から、馬毛島におけるシカ個体群をはじめとした哺乳類とその生息環境の保全に関する要望書を提出しますので、ご検討の上、これらの保全をすすめるために必要な措置を取られることを要望します。

なお参考資料として、日本哺乳類学会哺乳類保護管理専門委員会が提出したこの事業の環境影響評価準備書に対する意見書の写しを添付します。

<連絡先>

浅野 玄（日本哺乳類学会 哺乳類保護管理専門委員会委員長）

〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学応用生物科学部（Tel. 058-293-2933）

2022年6月24日

## 馬毛島におけるニホンジカをはじめとした哺乳類の保全に関する要望書 －馬毛島基地（仮称）建設事業に係る環境影響評価準備書に関連して－

一般社団法人 日本哺乳類学会  
理事長 押田龍夫

馬毛島に生息するニホンジカ（以下、シカという）個体群をはじめとした哺乳類とその生息環境の保全のため、以下のことを要望します。なお、下記要望の具体的内容、背景などについては、参考資料として添付した日本哺乳類学会哺乳類保護管理専門委員会の意見書を参照してください。

### 1 準備書に記載された調査結果に関して不備な点を修正し、保全を検討する資料として充実させること。

シカの個体数推定などの各調査項目において、観察データと結論を導き出した手順・分析方法に関して記載されていない点が多い。また、センサーカメラを用いた調査のデータは、全島の密度推定と調査地点ごとのシカの利用頻度の分析にも活用できるが、それらがなされていない。さらに、森林の食物資源量の相対的評価や、シカの高密度化に伴ういくつかの環境指標の調査なども行われていない。

これらは、シカ個体群とその生息環境の保全を検討するうえで必要な情報である。補足調査や既存のデータの再分析などにより、これらの不備を修正して公表すべきである。

### 2 シカ個体群保全のため、工事の開始から完成・供用開始、さらにその後の継続的管理に至るシナリオを想定し、モニタリングに基づく柔軟な施策を進めること。またそのための検討会等の体制を整備すること。

準備書によれば、馬毛島で工事による改変を受けずにシカが利用できると考えられる土地面積は、着工前 817ha(全島, 100%), 工事中の改変地が最も広がった時点で 320ha(39%), 工事完成・供用開始時 402ha (49%) と変化する。このうち工事中の生息可能面積が約 60% 減少するときがシカ個体群存続のクリティカルなポイントとなる。この時期に、工事が行われない地域にシカを多数移動させれば密度が高まり、植生に重大な影響が生じる可能性がある。したがって、現在馬毛島の全域に生息し、個体数 700~1,000 頭と推測されているシカとその生息環境を、工事期間中にどのように管理するかは重要な問題となる。また当然の

ことながら供用開始後は、現在よりもかなり小さい規模のシカ個体群を、植生への影響が著しく増加しない状態で、安定的に維持することが目標となるだろう。

このようなシナリオを想定して施策を進める際には、工事の進展に対応した管理の目標と方針を設定する必要がある。また、準備書でも指摘されているように、シカ個体群や環境の変動は不確実性が高く予測が困難であるので、モニタリングを行い、その結果を分析・評価しながら施策を調整することが求められる。これらを進めるには、モニタリング結果の評価と施策へのアドバイスをを行う専門家によるシカ保全対策検討会（仮称）等を含む体制整備が必要だと考える。

### **3 基地建設後の馬毛島における永続的な自然環境の保全と管理は防衛省が行い、そのための体制を整備すること。**

準備書では事後調査期間を 3 年としているが、シカを含む自然環境の保全は永続的な課題であり、恒久的なモニタリングと管理が必要であるので、基地管理の一環としてそのための体制を作って取り組むべきである。馬毛島は防衛省の所管地であり、島への立ち入りやそこで行う行為にも強い規制が加わると想定されるので、これを実施できるのは防衛省以外にない。なお、英国および米国では、軍用地における環境保全や狩猟管理は軍の責任であり、環境部局との協議を踏まえながら実施されている。

#### 参考資料（別添）

- ・馬毛島基地（仮称）建設事業に係る環境影響評価準備書に対する意見書  
（日本哺乳類学会・哺乳類保護管理専門委員会）